

地域的課題解決への意欲を喚起する高等学校地理学習の単元開発

～水俣病問題への支援者の関わりを題材として～

愛媛大学教育学部 川瀬 久美子

1. はじめに

国際地理連合・地理教育委員会が2005年に発表したルツェルン宣言では、持続可能な開発を実行する地理的能力として、自然システムや社会-経済システムに関する地理的知識や地理的理解、地理的技能、態度と価値観を挙げている。本研究では、ルツェルン宣言のいう「ローカル、地域、国家的および国際的な課題と問題の解決を模索することに対する献身的努力」を地理的な“態度と価値観”の一つとした上で、課題解決への意欲の喚起や向上を目的として、水俣病問題と支援者を題材とした単元開発を行うものである。

地理教育では様々な社会的課題について学習するが、学習者は身近な地域の課題については当事者意識を持ちやすいものの、海外など遠隔地で発生している事象（貧困、民族問題、環境問題）については、しばしば当事者意識が希薄であったり欠如したりする。また、ある課題について学習して興味・関心を抱いたとしても、直接の当事者ではない自分にできることはない、と無力感から思考停止に陥る学習者も少なくない。ある課題の直接の当事者ではない人間にできることはあるのか、その課題に関わろうとすることにどのような意味・意義があるのか、地理教育において学習者に考える機会を設ける必要がある。

本研究ではESD（持続可能な開発のための教育）として「課題解決への意欲」を育成するための単元開発を、水俣病事件を題材として行った。水俣病問題を題材とすることには、以下の3点の意義がある。

① 地域的課題の動的理解

水俣病は小学校社会科の地理分野や中等教育の地理学習、あるいは公民学習において、四大公害病の一つとして学習される。しかし、高度経済成長期に経済成長を優先した結果として発生したこと、この反省に立って環境基本法が制定されたこと、など戦後の日本社会の歴史的出来事として説明され、静的な理解にとどまることが多い。あるいは花田（2017）が指摘するように、暗い話やつらい話ばかりでなく子ども達に未来を展望する明るい話の公害学習を目論み、水俣市の現在として環境モデル都市づくりや「もやい直し」を紹介して終わることも多い。しかし、熊本水俣病は加害企業チッソが見舞金契約によって被害者を封じ込めていた状況を、被害者および支援者が奮闘して「被害者を救済せよ」という国民的世論を高め、補償を勝ち取ったという経緯がある。この奮闘のドラマは決して暗い話や辛い話に落とし込まれるべきではなく、人間の持つ粘り強さや連帯の力強さを現在の私たちに示すものである。水俣病問題の解決の経緯をドラマティックに理解することで、学習者自身の課題解決への意欲を喚起することができる。

② 地域的課題の当事者の立場と第3者の役割

水俣病問題では、被害者、加害企業、加害企業の労働者が多数であった市民、加害企業を地域経済の根幹と位置付けていた行政、など当事者それぞれの立場で利害が対立した。水俣病問題では各当事者の立場による事象のとらえ方や結果としての行動の違いを推測しながら、利害から離れた第3者が関わることの意義を考えさせることができる。

③ 支援者に関する資料の豊富さ

水俣病問題の解決には、全国からの義援金、熊本や東京の「水俣病を告発する会」など日本各地で結成された支援団体、新潟の水俣病患者との連携、水俣に移住したり遠方から支援を続ける個人など、多くの人々の支援があった。当時の支援の様子は新聞記事や書籍（個人の回想録）、動画（映画など）などで知ることができる¹⁾。課題解決に関わる人々の広がり把握し、直接の当事者ではない人間が関わることの意義を具体的に考えさせることが可能である。

本稿では、出自や来歴が水俣以外の土地であるが、自身の居住する土地において、あるいは水俣を訪れて水俣病問題解決に取り組んだ者を、域外支援者と呼ぶ。まず水俣病問題において域外支援者がどのように関わってきたのか、既存文献や域外支援者へのインタビューから整理する²⁾。これらの資料を活用しながら、ある課題の直接の当事者ではない人間がその課題に関わることの意義について論考し、課題解決への意欲を喚起する学習単元を提案する。

2. 水俣病問題における域外支援者の関わり

1) 反公害運動の全国展開

水俣病は1956年の水俣病の公式確認以後しばらく原因不明の奇病とされ、初期には被害が漁村に集中して現れたこともあり、伝染病が疑われた。また、水俣の地域経済におけるチッソの圧倒的優位性のため、工場排水の停止を求める漁民達への市民の眼差しは冷たく、被害者は地域社会で差別され孤立していった。チッソの工場排水が原因だと見抜いていた不知火海沿岸漁民が1959年11月には総決起大会を起こし、工場に押し入った漁民達と警官隊の衝突も発生した。しかし同年12月末、経済的に困窮する被害者やその家族と加害企業チッソの間で見舞金契約³⁾が交わされ、その後被害者は沈黙を強いられる。有機水銀を含んだ工場廃液が停止したのち、政府による公害認定がされるのは1968年9月のことで、その後、水俣病問題をめぐって再び社会運動が激化した（図1）。

水俣病患者が加害企業チッソに対して加害責任を追及し謝罪と補償を求める運動、および厚生省を始めとする行政に対して水俣病患者認定を求めていく運動を、本稿では水俣病の反公害運動とする。また、水俣病患者の福祉や経済活動などを多様な形で支える活動を、被害者支援とする。

反公害運動は有機水銀汚染の原発地であるチッソ水俣工場周辺と、東京のチッソ本社や厚生省などを舞台に主に展開された。反公害運動の主体は、水俣病によって身体的・経済的・社会的な被害を被った不知火海沿岸の水俣病患者およびその家族である。しかし、水俣病の反公害運動には、さらに有機水銀汚染の受苦圏以外の多くの人々が関

水俣病をめぐる出来事

- 1956 (昭和31) 水俣病患者 公式確認 (原因不明の奇病とされる)。
- 1959 (昭和34) 患者とチッソが「見舞金契約」調印 ← チッソ「和解している」
- 1965 (昭和40) 新潟水俣病公式確認
- 1967 (昭和42) 新潟水俣病患者が昭和電工 (株) に慰謝料を請求し提訴
- 1968 (昭和43) 「新潟水俣病被災者の会」が水俣を訪問・交流
チッソが有機水銀を含む水俣工場からの廃水を停止。
政府による公式見解「水俣病はチッソ工場が原因」
(水俣病を公害病と認定) ↑
チッソ「健康被害は予見不可能であり、工場に過失責任はない」

図1 水俣病をめぐる出来事

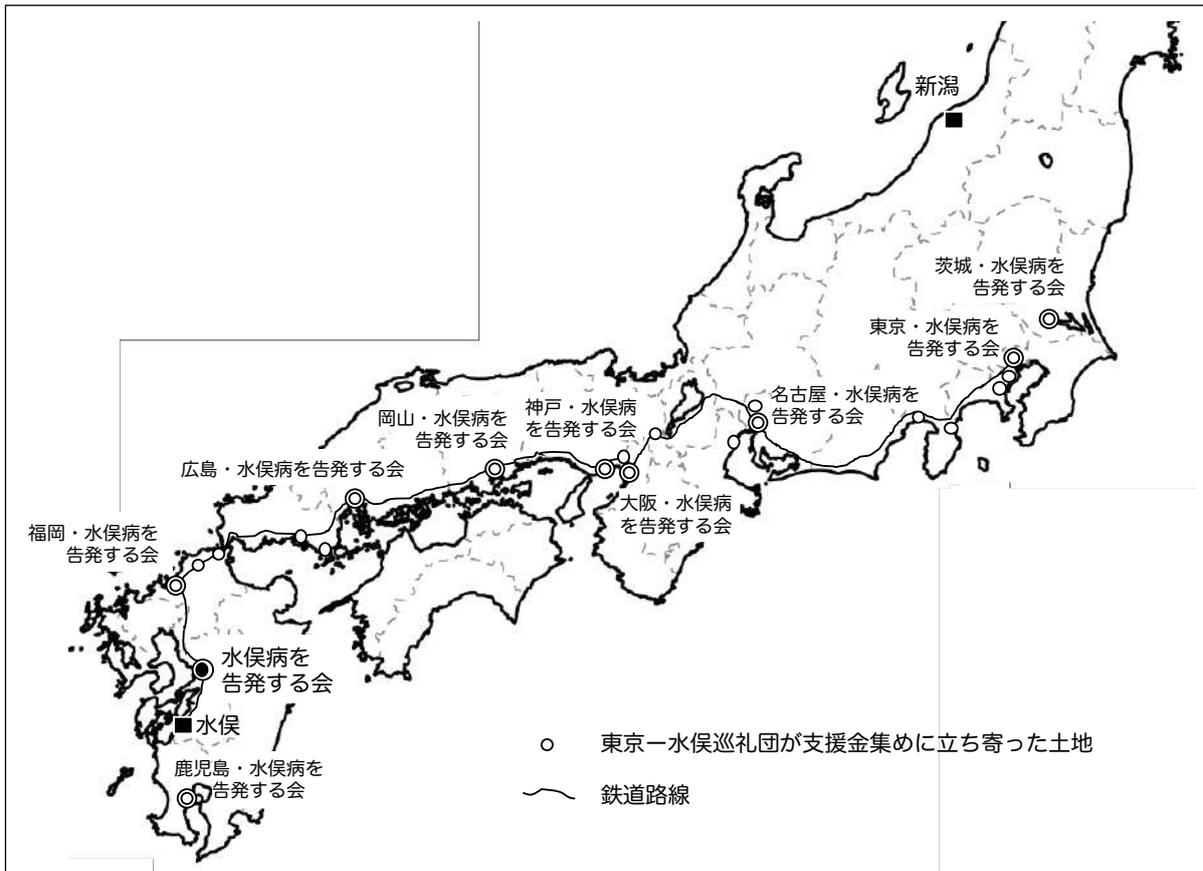


図2 全国の「水俣病を告発する会」と東京-水俣巡礼団の巡礼ルート

わってきた。

1970年代は水俣病の反公害運動が全国的に展開された。水俣という九州の1地域の問題が、どれくらい全国の人々の関心を集めて行動に駆り立てていたのか、各地の「水俣病を告発する会」と「東京-水俣水俣巡礼団」を例に検証する。

「水俣病を告発する会」の発足にさかのぼり、1968年1月、水俣病患者を支援する「水俣病対策市民会議」（後の「水俣病市民会議」。本稿では以下、「市民会議」と略記）が発足した。それ以前には見舞金契約を締結した「水俣病患者家庭互助会」のような水俣病当事者組織は存在したが、当事者以外の初めての支援者組織だった。時系列としては1968年9月の公害認定より前の発足である。発足のきっかけは、1965年に新潟水俣病が公式確認され、原因企業の昭和電工に対して訴訟を起こした新潟水俣病の患者らが水俣市を訪問することとなり、かねてより水俣病患者支援を行っていた市議会議員日吉フミコが中心となって、訪問団を受け入れるため組織された（坂東 2005、日吉・松本 2005、図1）。1962年にはチッソ工場労働者の安賃闘争で労働組合が分裂し、「水俣病に対して何もしてこなかった」という「恥宣言」が決議されるなど、この頃には水俣においても市民の水俣病患者へのまなざしに変化していた。

市民会議を応援する組織として熊本市で1969年に結成されたのが「水俣病を告発する会」（熊本市を拠点とする本会を以下「告発する会」と略記する）である。そして、1970年に入ると「東京・水俣病を告発する会」を始めとして、全国で水俣病被害者の救済を求める会が組織されるようになった。成（2007）によると、その数は全国で17団体にのぼったという。図2に筆者が資料などで確認できた10団体の位置を示す。鹿児島で水俣病を告発する会を立ち上げたT氏（後述する域外支援者）によると、全国の告発する会はそれぞれの土地で独自に組織されたもので、全国の告発する会が系統的に組織されていたわけではなかった。熊本の告発する会は水俣市および熊本市で展開された反公害運動や被害者の支援を行い、東京・告発する会は被害者のチッソ本社への直接交渉や厚生省へのアピールなどをサポートした。また、各地の告発する会は、それぞれの地域で水俣病に関する学習会を開催したり被害者救済をアピールするデモを行った。

全国的に公害への関心が高まるなか、俳優の砂田明⁴⁾（当時42歳）は9名の若者（19～25歳）を率いて東京-水俣巡礼団を結成した。1970年7月に11日間をかけてスゲ笠と白装束の巡礼姿で東京から水俣まで列車など乗り継ぎ、途中の街頭で浄財（水俣病被害者への支援金）を集めながら巡った。街頭に立って浄財を呼びかける様子、水俣に到着して被害者達に浄財を渡す場面や歓待を受ける様子が、映像記録に残っている⁵⁾。そこで映し出される「立ちなはれ」から始まる砂田の訴えや、「掃除のおばちゃんや小さい子がくれた小銭を紙幣に両替するにしのびなく、そのまま持ってきました」という若者の言葉からは、水俣病問題解決に取り組む当時の支援者の熱意が生々しく伝わってくる。

2) 水俣における被害者支援への域外支援者の参与

東京および各地で展開された反公害運動と同時に、被害の原発地である水俣を訪れて反公害運動や被害者の支援活動に身を投じていった人々がいた。

一例として、まず1970年代から反公害運動に関わってきたT氏を取り上げる。T氏（1940

年代生まれ)は福岡県生まれで、鹿児島大学在学中から水俣を訪問して、チッソ工場正門前の抗議活動などに参加してきた。1971年に大学の仲間と「鹿児島・水俣病を告発する会」を立ち上げた。そして、一次訴訟の裁判の傍聴や、鹿児島県北部地域の水俣病患者掘り起こしなどに取り組む。T氏によれば、水俣病患者の認定を求める運動のピークは73~74年で、T氏はその後インドネシアやタイなどアジアの水銀汚染の交流調査など行いつつ、水俣病患者の生活支援を現在まで続けている。T氏が在籍当時の鹿児島大学では、沖縄問題やベトナム反戦、大学改革などに対して学生グループが取り組んでいた。

T氏 あとは環境の問題に取り組んだりとか、っていうのを始めていった中に、水俣の問題もやろうやないかになって、5人か10人くらいが主になって、大学の教官でも関心を持っている人たちと「告発する会」をつくったり、マッサージ師の人とか、高校の先生、高校生も入ってきました。だから、そのベースは大学闘争という枠組みで、皆が社会の変革やそういうものを求めようと。ただ、そういうひずみのあるところは色んな問題、当時でいえば三里塚の問題とかベトナム反戦の動きとか、地域の公害の問題とかの中の1つと言っていると思いますが、水俣の問題も出てきたっていう感じですかね。

T氏の語る当時の10代後半~20代の若者を取り巻いていた時代の空気は、同じように水俣で現在も被害者支援に取り組んでいる高倉史郎氏が水俣病被害者支援に携わるようになった経緯からも伺うことができる。

高倉史郎氏は1951年千葉県生まれ。水俣病患者の支援活動をしながら、水俣市で甘夏の減農薬・有機栽培と販売を行う事業所「ガイアみなまた」を設立し、今に至っている。学生時代は宇井純が東京で開講していた自主講座「公害原論」に参加していた。講座には、当時患者運動のリーダーしていた川本輝夫や、関東の学生を率いて東京から水俣まで患者支援のための浄財(義援金)を集めながら旅し、その後も支援活動を続けた俳優・砂田明なども招聘されて発言していたという。

高倉氏 そういうことに影響されて卒業してから、宇井さんの口癖の一つに、その「こういう講義の場で公害の事を学んで知って知った気にならないで欲しい」ということをね言われてたんですね。必ず現地に行ってその被害者の姿を見て、そしてそのそれこそ例えば水俣だったら地理的な要因があってこの内海に汚染物質が流されることによって非常に濃厚な水銀汚染が生まれてしまったというその事実をきちんと見てほしいというと言ってた人なんで、そういうこともあってちょっと全国回ってみたいなと思ったんです。

公害問題とともに教育問題にも関心を持っていた高倉氏は、1975年、大学卒業後の旅行で福岡県柳川市の伝習館高校⁶⁾に立ち寄るつもりが、期せずして水俣駅に降り立ち、そのまま水俣に住み着くことになった(高倉2008)。

水俣において域外支援者が支援活動に継続的に参加することができた理由に、水俣病支援センター相思社の存在がある。相思社は1973年に患者家族や水俣病市民会議、水俣病を告発する会のメンバーが参集して設立された支援運動の拠点であり、水俣市袋の山の上

にある。1975年に、高倉氏が一夜の宿として紹介されたのが相思社だった。

高倉氏　そこで初めて僕は水俣病を…映画で見たりはしてましたけれども患者の症状というのはどういうものなのかね、一緒に働いてみて「そうなんだ」って非常によくわかったというのがありますね。まあ、一見その方達を見て、黙って座っておられたらあの普通の人なんです。体も元漁師だったりするからがっちりしてるし腕なんか太かったですからね。「え？」と思ったんだけど、一緒に働くとね、水俣病の症状というのは何なのか、運動失調とか視野狭窄って医学用語でしか知らなかったことが実際においてみてわかるんですね。それで本当に深刻な問題だったのは、やっぱりそこに来てわかったというのがありますね。

そして2ヶ月ぐらい暮らすうちに、もうちょっとここで働いてみないかって誘われてとても面白いと思ったので、いったんその下宿を整理しにですね東京に帰って、親にも「出ます」って言ってからもう一回水俣に戻ってきて、そのままです。40年間ですね。

高倉氏は、学生時代に高校の図書室が学生運動に占拠されたり、卒業式において「仰げば尊し」でなく革命歌「インターナショナル」を歌う生徒がいたという経験をしている（高倉 2008）。若者が社会の変革に取り組むのが当然という空気の中で、1970年代に水俣を訪れ被害者支援に取り組んだ人数は相当数に昇ったと推測される。相思社はこのように水俣病に関心を持つ水俣地域外の人々に、水俣病患者の現状を発信し来訪者を受け入れる活動を積極的に行なっていた。そのひとつに1977年から始まった「水俣実践学校」とその後継の「水俣生活学校」がある。

実践学校では1週間～10日、生活学校では1年をかけ、昼間は水俣病被害者らと援農・援漁や協働労働に従事し、夜は水俣病や国内外の公害問題などについて講義を受けたり被害者への聞き取り調査を行った（丹野 2015、及川 2016）。この生活学校設立の意図について、柳田耕一は以下のように語っている⁷⁾。

自分たちが十年水俣に住んで感じるのですが、これからもここで生きていこうとするとき、これまでのように過去に向かって振り返る水俣というのじゃなくて、作りたてる水俣つまり将来に向かっての水俣をイメージしていきたいということがあったわけです。館の中に陳列する道具も、現実にもそれを使って耕したり魚をとったりしているという生きた空間を作れないものかと考えたとき、そのイメージの具体化として「実践学校」の一年版が出てきたんです。

今までの「実践学校」の経験の中で、水俣病の現実にふれたということはもちろんですが、それ以上に漁や山仕事を初めてやり、田んぼに初めて裸足で入ったことなどが若い人に水俣病理解の実感を植えつけているということがある。そういう水俣の日常に生にふれることから本当の理解が生まれるし、歴史を伝えるのは物ではなくて人間なんだからと不知火海総合学術調査団の最首さんなどに話していたら、生活学校の話が出てきたんですよ。

柳田氏が語るように、実践学校や生活学校は「水俣病を理解するとはどういうことか」

という問いを源として、「支援」の意味や内容を掘り下げて大きく広げる活動だった。

高倉氏 まあ、相思社にずっと居られたのは、その水俣病問題に対する関心とか… だから僕は、自分は支援と思ってないんで。ありはしましたけれども、そういう意味ではねえ…もうちょっと詳しくお話ししないといけないんでしょうけども…。なんていうかな…正しい支援者じゃなかったと思うんですよ。やっぱり水俣病患者を助けるという同情心とか共感って言うてもいいかもしれないけど、そういう気持ちはねえ、ないわけじゃないけども、あのそんな実際のところ強くなかったんですよ。僕は相思社の生活が面白かったのは小さな共同体だったんです、相思社が。当時水俣に、第一訴訟終わった後ですから、その後に残った支援者たちが一つの拠点を作って水俣に帰ってきた患者達を応援するというそういう場所になってたんでね。その支援者たちは自分たちで暮らしをつくっていかなきゃいけないから、自分たちの働く場でもあったんですよ。で経済的に成り立たせなきゃいけないんで、じゃあ何をやって生計を立てるのかという、それも考えなきゃいけなかったし。でみんなそれこそ、ここ（著者注 ガイアみなまた）じゃないですけども一緒にご飯を食べて。ほとんど独身、一組夫婦ありましたけどあと独身だったんで、一緒に暮らしてというのがあった。すごくそれが僕はそれまで小さな共同体ということにとっても関心があったので、「あ、ちょっといてみよう」という気になったということですね。

戦後の高度経済成長期を経て、共産主義を目指した学生運動は終焉を迎えつつあり、核家族世帯の増加や地域コミュニティの瓦解が進行する時代であった。特に都市部で顕著なその動きに対して、相思社の自治や暮らし方が新しい共同体の形の一つとして若者を惹きつけたことが推測される。また、高倉は生活学校・実践学校が、水俣の地域外の若者を惹きつけたもう一つの意味を指摘している。

高倉氏 世の中で生きづらい人、会うとよくわかるんですけど生きづらい人でね、必要な生活で生きづらい人で、小さな共同体を渡り歩きながら相思社に立ち寄るんですよ。相思社での生活が気に入ったらしくてもうちょっといたっていうんでそしていてもらえていた人ですね。

川瀬 出会いも相思社ということ。男性女性半々ぐらいですか

高倉氏 そうですね半々…あんまり頭に浮かばないんですけど、その生活学校は初めてから女の人が多くなってきた。それまでやっぱり男が多かったかなあ。

（中略）

高倉氏 全体的に言うんですけども、男性の方がかつての学生運動に近い人も多かったんです。女性はあんまり、いないわけじゃないけれども、そういう人は少なかった。なんとなくうちの女房もその旅行中にきちちゃったっていうような感じみたいな人たちが多かった。TYさんなんかは実践学校に来て、そこで水俣に非常に強く惹かれて残っちゃった、みたいな。

川瀬：学生運動をしてたということもなく？

高倉氏 直接水俣に、という感じです。男連中、特に僕らの世代は運学生運動の一番最後

の時期に当たるから、それぞれ何らかの形では関わっておりました。

このように、地域外から水俣を訪れて水俣という土地と水俣病患者に関わっていった人の中には、相思社を通して地域の風土に根付いた生業で生きる生活や新しい共同体の中に自分の居場所を見出した人いた。社会運動の流れから水俣に関わった人と、自分の居場所を求めて水俣を訪れた人にはジェンダー的傾向があった可能性がある。

以上のような水俣病に関する反公害運動の全国展開と域外支援者の水俣への参入には、どのような意義があったのだろうか。水俣病は首都東京から遠く離れた土地で発生しており、しかも加害企業チッソは地域経済の雄として君臨していた。実際に見舞金契約以降、公害認定されるまで水俣病は世間的にはおさまったかのように見られていた。新潟で水俣病が発生し、熊本水俣病も公害認定される一方、徐々に水俣市民の意識も変化してきた。とはいえ、町の発展に寄与してきたチッソへの忠義や遠慮は捨てがたく、水俣市民が一丸となって反公害運動や被害者への支援活動に取り組むということではなかった。また、水俣病の病状が深刻で自ら活動に参加しにくい被害者が少なくない中、被害者やその家族だけによる反公害運動には限界があった。

高校教師・本田啓吉が発した「義によって助太刀いたす」は水俣病の反公害運動のローガンとなったが、当事者は地縁・血縁が複雑に絡み合った「義理」に縛られている。これに対して、域外支援者はチッソにまつわる利害対立からは自由であり、事態を第三者として客観的に捉え、自らの「正義」にもとづく判断で行動することができた。自分が直接の当事者ではない地域的課題に域外支援者が取り組むことの意義はここにある。

3. 高校地理分野での単元開発

前項まで、水俣病問題における域外支援者の支援活動の意義について、文献やインタビュー調査から検討した。それを踏まえ、世界の様々な課題解決への意欲を喚起する高校地理の学習単元を開発する。

1) 学習指導要領における位置づけ

本単元は平成 30 年告示の高等学校学習指導要領の地理歴史分野の「地理総合」の大項目 B「国際理解と国際協力」あるいは大項目 C「持続可能な地域づくりと私たち」に位置付けられる。大項目 B「国際理解と国際協力」では中項目(2)イ(ア)「世界各地で見られる地球環境問題、資源・エネルギー問題、人口・食料問題及び居住・都市問題などの地球的課題について、地域の結び付きや持続可能な社会づくりなどに着目して、主題を設定し、現状や要因、解決の方向性などを多面的・多角的に考察し、表現すること」、あるいは大項目 C「持続可能な地域づくりと私たち」では中項目(2)生活圏の調査と地域の展望のイ(ア)「生活圏の地理的な課題について、生活圏内や生活圏外との結び付き、地域の成り立ちや変容、持続可能な地域づくりなどに着目して、主題を設定し、課題解決に求められる取組などを多面的・多角的に考察、構想し、表現すること」に位置付けられる。大項目 B では世界の地理的事象を取り扱うが、水俣の地理は多くの学習者にとっては馴染みがないという点や課題解決への支援について受苦圏よりさらに大きな空間スケールで考える、という点では、大項目 B に位置付けても良いだろう。一方、大項目 C は身近な地域の地域調査や課題について取り扱うものだが、水俣病問題が学習者の生活空間と近い空間スケールで発生したことや、一

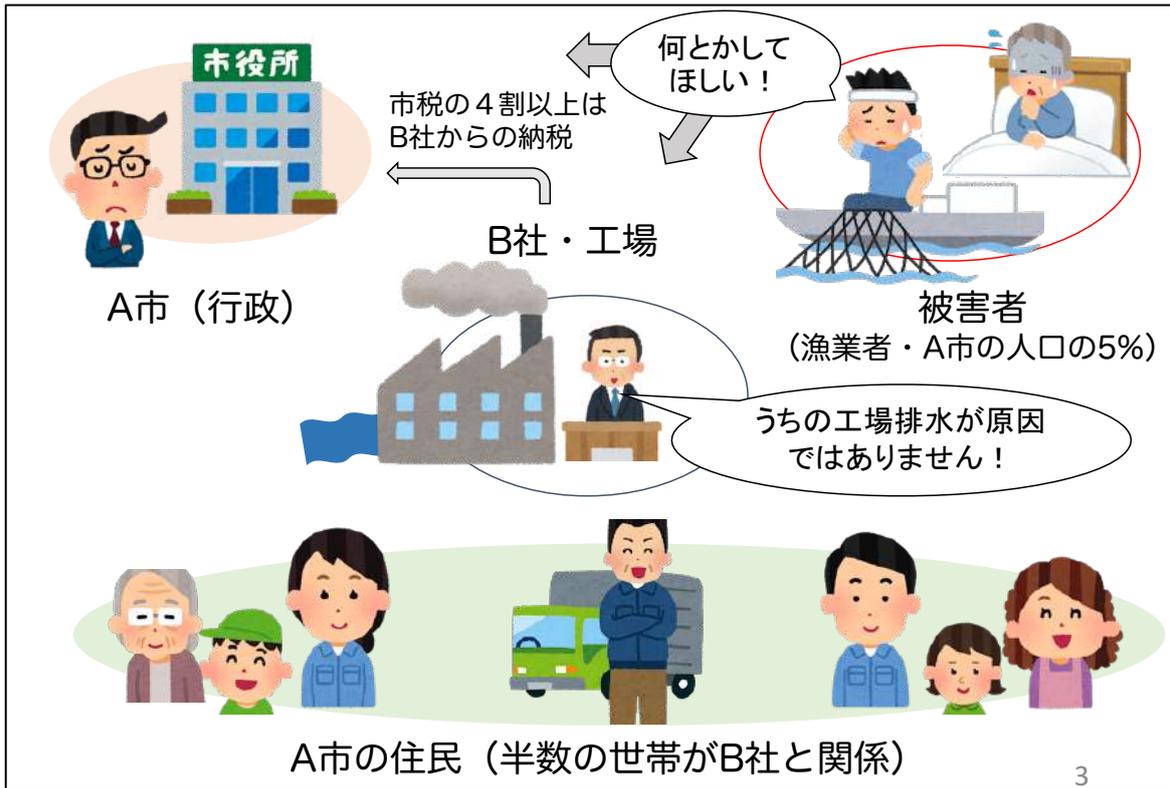


図3 A市で発生した健康被害と社会構造

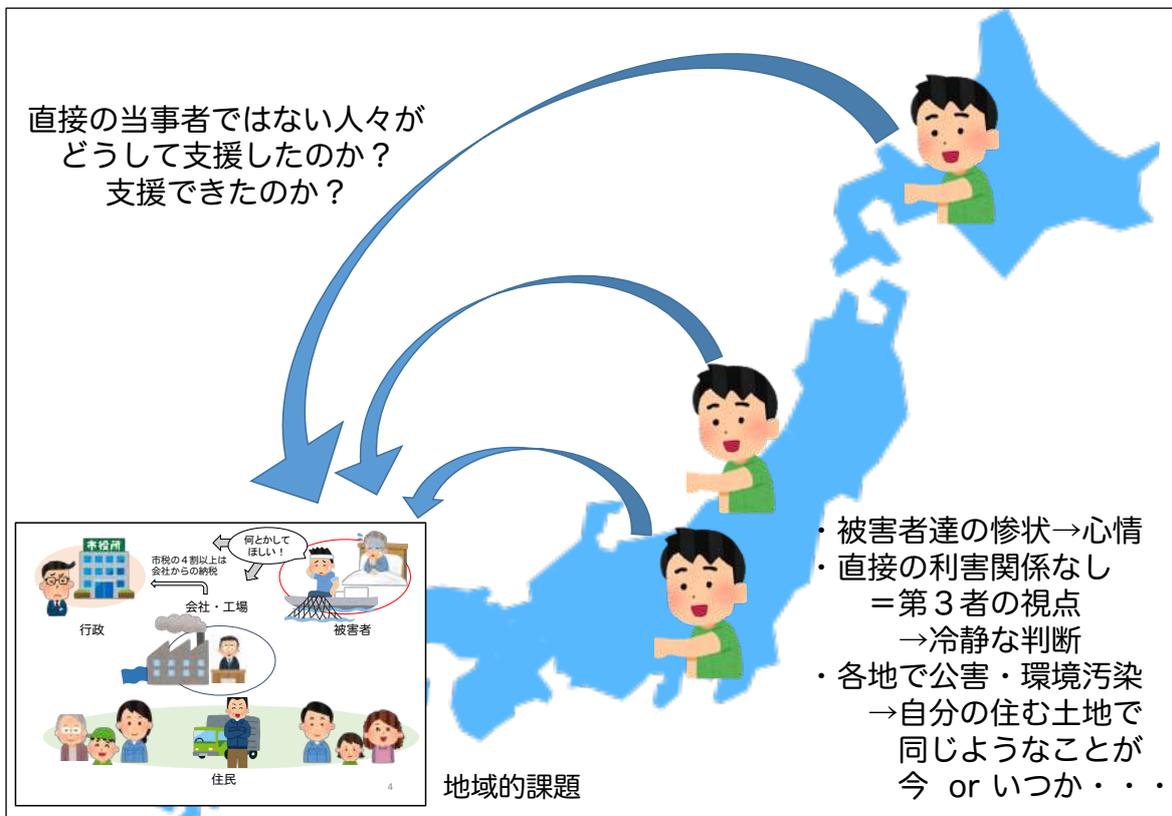


図4 直接の当事者ではない人々の地域的課題への参与

つの生活空間内に利害関係を踏まえた多様な立場と考え方があり、それが課題解決を困難にすることを考えさせるという点では、身近な生活圏の課題探求から発展させたものとして位置付けることができる。

2) 単元構成の内容と工夫

単元は(1)地形図の読図による水俣の地域性の理解と当事者の状況把握 (2)支援者の空間的広がり の理解と支援の意義 の各1時間全2時間の構成とした。

第1時では地形図の読図によって、不知火海に面した水俣川河口三角州に市街地が集中しており、そこにチッソ水俣工場が立地していることなど、水俣の土地条件を理解させる⁸⁾。その上で、企業城下町として発展した町(水俣を模したA市⁹⁾)において、原因不明だが明らかに工場排水に起因すると推測される健康被害が発生した場合の、立場の違いによる対応を「自分がその立場であったらどう対応するか。あるいは自分はしないが、こういう対応がありうる」というように推測させる(図3)。被害者である漁民、行政、市民(原因工場に関連する仕事に就くものが半数を占める)、それぞれの立場で対応を考えさせることで、利害や立場の違いに基づく考え方の対立のために地域的課題の解決が容易ではない場合があることを理解させる。

第2時には、実際の水俣市における水俣病をめぐる経緯を、写真資料などを提示しながら解説し、地域で被害者が孤立し見舞金契約の締結などで抑圧されていた様子を理解させる。そして、新潟水俣病患者の水俣訪問を契機に市民会議が結成されたり、東京-水俣巡礼団が浄財を集めながら水俣を訪問したこと、日本各地で告発する会が組織され国全体で水俣病問題解決の機運が高まっていったことなどを、図2のような地図や巡礼団の写真・映像を提示しながら解説する。そして、地域外における課題解決の機運の高まりが、当事者にどのような影響を与えたのか、前時に設定した立場に加害企業の立場を加えて推測させる。さらに、なぜ直接の当事者でない¹⁰⁾水俣以外の人々が支援に携わったのか考えさせたのち、持続可能な社会実現に向けて課題を解決するために必要な態度や行動は何か、考えをまとめさせる。指導上の工夫として、地域的課題の当事者の立場が多様であり、立場による対応を考えさせることで、水俣において被害者差別が発生したこと、それは望ましいことではなかったが企業城下町という水俣特有の地域社会が背景あったことを理解させる。

単元「持続可能な社会をつくるために」 授業計画書

1. 主 題

水俣病問題の解決にどのような人が関わっていったのか整理しながら、課題解決に必要な態度や行動について考えよう。

2. 単元の目標

○地域社会の課題に対しては、立場によって様々な考えや態度・行動があることを考え、表現できる。

○地域社会の課題解決に当事者以外の関与や関心がどのように影響するか考え、表現できる。

○課題解決に必要な態度や行動について、自分のこととして考え、表現することができる。

3. 指導計画（全2時間）

| 次 | 学習内容 | 評価規準（観点） | 時間 |
|---|--|---|----|
| 1 | 地域で様々な利害がからむ問題が起きたときに、それぞれの立場の人々がどのように考えたり行動するか、考えよう。 | ◇地域問題の地理的背景について地図を活用しながら考える。 （資料活用／知識・理解） ◇地域問題には様々な立場・利害がある。それぞれの立場の中でも色々な考え方や行動がありえることを推測し、文章にまとめている。 （思考・判断・表現／知識・理解） | 1 |
| 2 | 水俣病問題の解決にどのような人が関わっていったのか整理しながら、課題解決に必要な態度や行動について考えよう。 | ◇当事者以外の支援者が様々な立場の当事者に与えた影響・変化について多面的・多角的に考察し表現している。 （思考・判断・表現） ◇課題解決への参画について「自分ごと」として捉え、冷静に自己評価し、態度や行動を身につけようとしている。 （関心・意欲・態度） | 1 |

4. 展開

第1時

| 学習活動（形態） | 時間 | ○教師の働きかけ ・予想させる生徒の反応 | ○指導の工夫 ◇評価（方法） | 授業資料 |
|--|----|--|--|-------------|
| 問い1 私たちは水俣病について何を知っているだろうか？ 水俣病問題からどのようなことを学ぶべきだろうか？ | | | | |
| 1 水俣病に関する既習事項や現状認識を確認する。 （全体） | 10 | ○水俣病に対して被害者・市民・行政がどのように対応したのだろうか？ ・熊本県で発生した。 ・海の魚を食べて発生した。 ・環境に配慮した経済活動を行わねばならない。 | ○これまでの水俣病に関する学習成果（「経済成長優先で健康や自然を損なってはいけない」と本学習の狙いが異なることを意識させるため、あえて結論的な問いをはじめに投げかけている。 | ① |
| 2 地形図から水俣の土地条件を読み取る。 （個人） ↓ （全体） | 15 | ・街が意外と小さい。 ・水俣駅の正面にチッソの工場がある。 ・広い埋立地がある。 | ○地図記号や等高線から、地形などの自然条件や市街地の立地の特徴を読み取ることができる。 （ワークシート・観察） | ② |
| 3 水俣病の症状についての解説 | 5 | ○食物連鎖による有機水銀の生物濃縮によって、魚介類を多く捕食した漁民から患者が多く発生した。 根本的治療法が無く、被害者は今なお苦しんでいる。 | ○前の学習活動で「水俣病は遺伝する」のような誤解や知識不足があれば補足する。 | ③ ④ ⑤ |
| 問い3 ある都市で環境汚染による健康被害が発生している。その都市の社会構造などを踏まえたうえで、被害者、A市の市民（健康被害は無い）、行政（A市の市長・市役所職員）の立場にたって、どのように考えたり対応するか考えなさい。 | | | | |

| | | | | |
|---|----|---|---|---|
| <p>4 立場によって考え方や行動が異なる可能性があることを考える。</p> <p>(個人) ↓ (全体)</p> | 20 | <p>○それぞれの立場に立って考え、自分がその立場だったらとる対応に近いものに印をつけよう。</p> <p>① 被害者 ・排水を止めるよう工場に訴える ・SNSで広く助けを募る</p> <p>② A市市民 ・同情するが放置する。 ・工場に訴える ・健康被害が怖いので引っ越す。</p> <p>③ 行政 ・工場に指導に入る。 ・原因究明を研究者に依頼する。</p> | <p>○積極的関与だけでなく無関心もあり得ることを示唆する。</p> <p>◇地域的課題を「自分ごと」として捉え、当事者の立場に立って考える。 (ワークシート・観察)</p> | ⑥ |
|---|----|---|---|---|

第1時 授業資料一覧

- ①水俣市エコパークの景観写真（恋路島、エコパーク水俣の慰霊碑、本願地蔵）：筆者撮影
- ②25000分の1地形図「水俣」（部分）
- ③メチル水銀蓄積のメカニズム：水俣病資料館・水俣病歴史考証館「水俣病10の知識」2004年
- ④被害者の写真：桑原史成『水俣事件』藤原書店、2013年
- ⑤胎児性患者の現在の写真：デイサービス施設ほっとはうすにて筆者撮影
- ⑥A市で発生した健康被害と社会構造（本稿図3 筆者作成）

第2時

| 学習活動（形態） | 時間 | ○教師の働きかけ ・予想させる生徒の反応 | ○指導の工夫 ◇評価（方法） | 授業資料 |
|--|-------------|--|--|-------------|
| <p>1 前時からの展開 当事者で課題解決が困難な場合があることを理解する。</p> <p>(全体)</p> | 10 | <p>○水俣病に対して被害者・市民・行政がどのように対応したのだろうか？</p> <p>・市民は被害者を支援せず差別した</p> <p>・行政は根本的解決をはからなかった。</p> <p>・謝罪・補償を要求した被害者は水俣市民からまた非難された。</p> | <p>○前時までの学習を振り返らせ、本時の学習に生かせるようにする。</p> <p>それぞれの立場でそうせざるを得ない背景・状況があったことに留意する。</p> <p>○課題の解決が当事者の努力だけでは難しいことを示す。</p> | ⑦ ⑧ ⑨ |
| <p>問い1 全国各地の人々による支援活動の活発化で、どのような影響・変化があっただろう</p> | | | | |
| <p>2 当事者以外の支援の影響・効果について考える。</p> <p>(個人) ↓ (全体)</p> | 5 15 | <p>○全国からの支援の様子を紹介（地図、動画資料）</p> <p>○前時からの発展問題として、それぞれの立場に立って、対応や考えに変化があったか考えよう。</p> <p>① 被害者 ・勇気づけられる</p> <p>② A市の市民 ・放置できない。 ・本当は支援したかった</p> <p>③ 行政 ・救済する</p> <p>④ B社のトップ</p> | <p>○水俣病被害者自身が直接交渉に赴いたり訴訟を起こしたりして奮闘したことを示す。</p> <p>○支援者が被害者の活動を後押ししたことを示す。</p> <p>◇それぞれの立場に与えた影響・変化について多面的・多角的に考察し表現している。 (ワークシート・観察)</p> | ⑩ ⑪ ⑫ |

| | | | | |
|---|----|---|---|---|
| | | ・企業イメージ悪化を怖れる | | |
| 問い2 直接の当事者ではない人々が、どうして支援したのだろうか？ 支援できたのだろ | | | | |
| 4 なぜ、当事者以外の人達は支援しようとしたのか、支援できたのか考える。 (個人) ↓ (全体) | 10 | ○当事者以外の人達の関わりについて考察を深め、その必要性について理解する。 ・心情的に ・第3者の視点→冷静な判断 ・自分の住む土地との関係 | ○自分自身が当事者ではない様々な地域問題があり、その場合でも、支援者として行動することの意義があることを示す。 | ⑱ |
| 問い3 持続可能な社会実現に向けて課題を解決するために必要な態度や行動はなんだろ | | | | |
| 5 持続可能な社会を形成するために必要なことを考える。 (個人) ↓ (全体) | 10 | ○持続可能な社会実現に向けて課題を解決するために必要な態度や行動はなんだろうか？ | ○一般論（私達に必要な態度・行動）ではなく、学習者自身に必要な態度・行動を考えさせる。 ◇課題解決への参画について「自分ごと」として捉え、冷静に自己評価し、態度や行動を身につけようとしている（ワークシート・観察） | |

第2時 授業資料一覧

- ⑦チッソ工場の排水浄化装置の写真：熊本日日新聞社編集局『水俣病 50 年一報道写真集』熊本日日新聞社、2007 年
- ⑧自宅での被害者の様子の写真：「水俣を見た 7 人の写真家たち」編集委員会『水俣を見た 7 人の写真家たち』『水俣を見た 7 人の写真家たち』編集委員会、2007 年
- ⑨見舞金契約を締結する写真：熊本日日新聞社編集局『水俣病 50 年一報道写真集』熊本日日新聞、2007 年
- ⑩チッソ本社前で社長に詰め寄る被害者達の写真：宮本成美『まだ名付けられていないものへ または、すでに忘れられた名前のために』現代書館、2010 年
- ⑪水俣病資料館企画展資料「水俣病市民会議 日吉フミコは動いた」2012 年
- ⑫全国の「水俣病を告発する会」と東京-水俣巡礼団の巡礼ルート（本稿図 2 筆者作成）
- ⑬チッソ・水俣工場前でのアピール、各地でのデモの写真：塩田武史『僕が写した愛しい水俣』岩波書店、2008 年
- ⑭被害者や支援者によるデモの写真：宮本成美『まだ名付けられていないものへ または、すでに忘れられた名前のために』現代書館、2010 年
- ⑮被害者や支援者による東京・厚生省前でのアピール写真：熊本日日新聞社編集局『水俣病 50 年一報道写真集』熊本日日新聞、2007 年
- ⑯東京-水俣巡礼団の写真：宮本成美『まだ名付けられていないものへまたは、すでに忘れられた名前のために』現代書館、2010 年
- ⑰街頭に立つ東京-水俣巡礼団や水俣での浄財受け渡しの様子の動画：土本典昭『水俣-患者さんとその世界』1971 年
- ⑱熊本水俣病第一次訴訟の判決を報じる新聞紙面「水俣病、チッソに全面責任」：毎日新聞 1973 年 3 月 20 日夕刊
- ⑲直接の当事者ではない人々の地域的課題への参与（本稿図 4 筆者作成）

4. 成果と課題

本研究で提案した授業計画の原案に基づいて、愛媛大学附属高校 2 年生の地理 B 選択者（受講生 47 名）を対象に、授業実践を行った。本稿で提示した指導案は、授業実践後の反省を踏まえて改良したものであるが、内容の展開や授業資料は同じである¹¹⁾。

2 時の最後の問い「日本や世界には環境問題、災害への対応、貧困、民族問題など、

様々な課題があります。持続可能な社会をつくるため、これらのような課題を解決するには、あなた自身のどのような態度や行動が必要ですか」という問いに対し、もっとも多かったのが、「世界や身の回りのことに関心を広げ積極的に情報を得ていく」という内容の記述であった（27名）。また、「知ったことを自ら発信して広める」という記述も見られた（11名）。そして、「自分にできる身近なことから行動する（ボランティアなど具体的な記述を含む）」（24名）や「（周囲と団結したり主体的に）行動する」（10名）のように行動の必要性も挙げられた。情報に関する記載が多かったのは、生徒がこれまでに学んだ水俣病問題の知識と本授業で得た知識にギャップがあり、物事を主体的に探求することの重要性が意識されたと推測される。「その問題が起きていると知った時点で自分も当事者であるから、見過ごしたり知らないふりをするのではなく、自分に今何ができるかを考え、行動に移していくことが必要」や「様々な課題がある中で、その被害にあっている人がいても、知らないとな誰も何もしないと思う。被害者自身が表立って伝えようとしてもムリがある。だから、私たちはたくさんの今おきている現状を知っていく必要があると思う」というコメントに現れているように、「知ったこと」についての責任感や「もっと知りたい」という欲求は、行動の意欲を生み出す前段階として不可欠であり、課題解決への意欲の萌芽とみなせよう。

5. おわりに

本研究では、水俣病事件が社会問題として顕在化した1970年代に水俣市域外でどのような支援活動があったのか整理するとともに、水俣に駆けつけた域外支援者の動機や活動についてインタビュー調査を行い、水俣病に関する反公害運動の全国展開と域外支援者の水俣への参入の意義について明らかにした。おそらく、水俣に暮らす被害者自身にとって水俣の外から駆けつけた域外支援者の存在は心強いものだったと推測されるが、この点については被害者へ確認する必要がある。水俣病問題は実のところ被害者の立場や心情も一様ではないし、症状を発症していない（と自称する）水俣市民が被害者へ向けるまなざしにも温度差がある。そして、当然、地域外から水俣を訪れて被害者支援に関わる支援者の来歴や水俣病問題および被害者への向き合いかたも人によって異なる。

本研究で提案した授業では、事象の理解をスムーズにするために、被害者・市民・行政のように立場を設定して授業を展開した。事象を整理したり抽象化して記述したりすることは、論理実証主義に基づく地理学・地理教育の方法の一つであるが、それによって生の人の姿が見えにくくなり、面白みが欠けた無機質なものになってしまうという批判もある（太田1997）。ESDとして地理教育を実践していくためには、地理学的な知識や技能の修得だけでなく、世界の出来事や身近な問題に積極的に関心を持って取り組んでいこうとする態度の育成が不可欠である。水俣病問題に限らず世界や日本で起きている様々な課題に取り組む生々しい人の姿を、肖像権やプライバシーなどに配慮しながら地理教育で取り上げることで、学習者自身の様々な課題に取り組もうとする意欲を喚起することができると思う。

謝辞

本研究を行うにあたり、資料収集では財団法人水俣病支援センターにお世話になりました。水俣での聞き取り調査ではT氏、高倉史郎氏にご協力いただきました。また、開発した単元の授業実践と研究協議では、愛媛大学附属高校の社会科の先生方をはじめ、愛媛大学教育学部社会科教室の先生方と県内の高等学校の社会科の先生方にご協力いただき、有益なコメントをいただきました。記して心より御礼申し上げます。

註

1) 熊本水俣病については、被害者や支援者の語りや映像が、実名とともに多く記録され公開されているという特徴がある。これに関連して花田(2017)は、固有名詞を伴った水俣の人間関係の濃密さが、水俣病問題の参入に高い障壁となっているとしている。一方、川瀬(2015)は、社会的に困難な状況に置かれている人を写した写真について、匿名の誰かではなく、固有名詞を持つ人物のほうが第三者に大きな印象を残し、「助けてあげたい」という衝動を生みやすいことを明らかにしている。実名を伴った資料を教材として用いることの教育効果は大きいと考えられる。

2) T氏へのインタビューは2019年1月7日に、高倉氏へのインタビューは2019年1月5日に水俣で行なった。

3) この時点でチッソは自社工場の排水が水俣病の原因であることを把握していたが、対外的には否定していた。チッソから死者への30万円の見舞金や生存患者へ10万円の年金を支給する代わりに、「今後原因が工場排水とわかって追加補償しない」という内容を含んでおり、後の一次訴訟の判決で「公序良俗に反する」と契約は無効とされた。

4) 砂田明はその後水俣に居を移し、水俣において反公害運動や被害者支援を続けながら、全国各地で独り芝居「天の魚」を上演し、演劇を通じて水俣病問題を告発し続けた。つまり、反公害運動の全国展開の立役者の一人であると同時に、水俣で活動を続けた域外支援者の中核的人物でもあった。

5) 東京-水俣巡礼団のメンバーや巡礼の様子がわかる資料として、土本典昭による映画『水俣-患者さんとその世界』や、1971年告発する会の機関紙「告発」第14号(1975年7月25日発行)、巡礼団の一人岩瀬の記した日記(岩瀬1999)がある。

6) 伝習館高校に勤務していた3人の教員が、学校の教育方針に反する授業を進めたと処罰された(伝習館高校事件)。

7) 水俣生活学校開設に向けて〈座談会〉座談会『水俣』第139号12月水俣病を告発する会〈1981年(昭56)〉より。https://tutimoto.inaba.ws/honbun.php?bunsho_id=314

8) 水俣には太平洋ベルトのコンビナートのような広大な工場が続くわけではなく、丘陵が海に迫っているため稲作など農業の展開も見られない。この土地条件が、チッソ工場の労働者か沿岸漁業という近代以降の就労選択の自由度の小ささの背景にあり、地域経済のチッソ依存を高めている。

9) 人口規模やチッソ工場や関連企業への就労人口などは、水俣病公式確認当時の水俣市の資料に基づく。ただし、学習者への水俣市へのネガティブイメージの植え付けを回

避するため、ここでの学習活動ではあえて A 市とした。

10) チッソ工場ではプラスチック製品の可塑剤としてアセトアルデヒドを製造する工程で、触媒の無機水銀が有機水銀となって流出し、周辺に健康被害を及ぼした。戦後のプラスチック製品の普及は目覚ましく、アセトアルデヒドの国内生産量の 4 割をチッソが担っていたことを鑑みると、当時のほとんどの日本国民が水俣病問題の間接的な当事者である。

11) 授業実践では第 2 時の「全国各地の人々による支援活動の活発化で、どのような影響・変化があっただろうか？」という発問は、問いを投げかけながら教員が回答していく方法を取っていた。この問いこそ、学習者自身が直接の当事者でない地域問題の解決に意欲を持つかどうかの要となる問いではないか、という指摘を授業終了後の研究協議で受け、本稿のように修正している。

付記：本研究は公益財団法人 国土地理協会の 2018 年度学術研究助成による成果である。本研究の内容は、2019 年 3 月 20 日に日本地理学会春季学術大会（新潟大学）で報告した。本稿は川瀬（2020）に、水俣病患者支援者のインタビューを加筆して修正したものである。

参考文献

岩瀬政夫（1999）『水俣巡礼 青春グラフィティ' 70～' 72』現代書館

及川英二郎（2016）水俣病事件と地域社会：1973 年以後を見る視点．東京学芸大学紀要 人文社会科学系 II ， 67， 81 -104

太田 勇（1997）『地域の姿が見える研究を』古今書院

川瀬久美子（2015）メディアにおける当事者の匿名 性に対する若い世代の意識：社会的困難な状況におかれた当事者の写真を対象として．愛媛大学教育学部紀要 62， 203-211

川瀬久美子（2020）地域的課題解決への意欲を喚起する高等学校地理学習の単元開発～水俣病問題への支援者の関わりを題材として～．愛媛大学教育学部紀要 67， 1-11

成 元哲（2007）義勇兵と NPO 法人とのあいだ-水俣病運動の軌跡(1) -中京大学現代社会学部紀要 1(1)， 59-93

高倉史朗（2008）水俣に住んで 30 年．原田正純・花田昌宣編『水俣学講義 第 4 集』， 215-246， 日本評論社

丹野春香（2015）柳田耕一と「水俣病を伝える」活動－思惟の基本構造を中心に－．環境教育， 25(1)， 48-59

花田昌宣（2017）被害の現場に身を置くということ 水俣学の構築の経験から．花田昌宣・久保田好生編『いま何が問われているか 水俣病の歴史と現在』， 217-234

坂東克彦（2005）過ちを三たび繰り返さないために．原田正純編『水俣学講義 第 2 集』， 141-172， 日本評論社

日吉フミコ・松本勉（2005）私と水俣病．原田正純編『水俣学講義 第 2 集』， 249-272， 日本評論社